
Put your finger in the handgun

照井 美海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Put your finger in the handgun

【ノード】

N2724D

【作者名】

照井 美海

【あらすじ】

「夏の暑い日。音と気配に心を寄せられ、僕は彼に出会った。」

C a n ‐ t r e m e m b e r

‘彼’の存在に気付いたのは、暑い暑い、夏のことだった。

僕は、教室の窓際の席で、暑い風を待ちわびながら、教師の口から届く単語単語を、アデニン、チミン、グアニン、シトシン、なんとなく頭の中で反復してた。

ノートには、英語を書き綴る。昨日覚えたイギリスバンドの、お気に入りのフレーズ。

脳内の音楽再生ボタンを、押す。

ノートに綴ったそのフレーズが、鮮明に、僕が好きなあの少しかすれた声で歌い上げられていく。

いつのまにか、教師の声も届かない。下敷きを扇ぐ音も。紙の擦れる音さえも。

つまらない日常の、つまらない僕の一時の娯楽。

‘カチヤリ’

その音は、確かに、僕に届いた。はっと、前を向く。
すべての音が、一瞬の間を置いて息を吹き返し、嬉しそうに騒つぐ。

僕は右斜め前の教室のドアに目を向ける。ガラスの先の廊下。僕が顔を向けた瞬間、黒い影が動いた。

‘なにか、いる?’

汗が、役目を思い出したかのように吹き出る。鼓動が、うるさい。

この気配は、確実に良い類のものではない。

僕は、ガラス越しに感じる・気配・を睨んだ。睨むように、見つめた。

そして、僕は見たのだ。

ガラスの端ぎりぎりに見えた、黒いハット帽を。

その時、僕は妙に納得した。・やはり・と。

高校入学時くらいから、僕は誰かに見張られているような、そんな気配をしじつちじつ感じるようになっていたからだ。

授業中は特に。

廊下から、ブランドから、教室の後ろから。
誰かに見張られている・気配・。

一年半も、僕は見張られていた。そう考えると僕はぞつと、寒気を覚えた。

・あいつだ、あいつが僕を見張っているんだ。・

明確な証拠に近いものを見せられた僕は、覚悟していたはずなのに、ひどく困惑した。

・誰? なんのために、・、・?

チャイムが鳴るまでの、その数分間、三十人近く居る教室の中で、

僕は今まで感じたことのないような孤独感と疎外感を感じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2724d/>

Put your finger in the handgun

2010年11月4日02時04分発行